

伊藤一彦編・著

『伊藤一彦が聞く 水賞歌人の世界』

(青磁社)

「水賞」受賞歌人たちの始発点、そして通過してきた風景。本来歌を通じてしか我々が知ることでできない世界を、伊藤一彦がインタビューによって紐解いていく。

インタビューを受けるのは高野公彦、佐木幸綱、永田和宏、小高賢、小島ゆかり、河野裕子、三枝昂之、栗木京子の八名。印象的だったのは、伊藤が必ず歌人たちに幼少期について尋ねる点である。彼は河野との語り合いのなかで、幼少期の記憶について「記憶していない部分を含めて、やっぱり魂に絶対に痕跡があると思いますよ」と述べる。また、あとがきでも心の原風景を知りたい思いがあったと述懐しており、歌人の原点への強い関心が伺える。

知識という観点からも興味深い本であるが、それに加えて歌を詠む心の土壌についても考えさせられた。よい歌(と簡単に定義することはできないが)を詠むには深い心が必要なのだ改めて気付かされる。文字起こしされた歌人たちの言葉はどれもあたたかく、歌と人に対する深い愛情を感じさせるものであった。

(島本ちひろ)

黒瀬河瀾歌集

『ひかりの針がうたふ』

(書肆侃侃房)

光漏る方へ這ひゆくひとつぶの命を見つむ闇の端より

過ぎてゆくもの、消えてゆくものを見つめ様々な生を歌っている。まず印象的なのが、海で水質検査をする仕事の歌。

しばらくを付ききてふいに逸れてゆくカモメをわれの未来と思ふ

みづくらげたただよふ博多湾の潮流されてゆく世間の方へ

瓦礫とともに国は何を燃やすのだらう海のはたてに見えぬみちのく

九州の海で作者は、海でつながっている東北の被災地に思いを馳せる。怒りでもなく、あきらめでもなく静かに目の前のそして遠くの生とともにいる。

卓の上に垂れしよだれを掴まむと寝覚めの五指は左右にすべりぬ

児は遠き弥生の野火を見つめをり外輪山を背にして抱け

多く収録されている子どもの歌にも、生き生きとした一つの生を俯瞰して見つめる作者のまなざしを感じる。時間や距離を超えた祈りのような一冊だ。

(斎藤 美衣)

千葉聡歌集

『グラウンドを駆けるモーツァルト』

(角川書店)

短歌とエッセイを合わせた第七歌集であり、テーマは主に学生時代の回想と著者が今年三月まで勤務した横浜市立桜丘高校のできごととの二つである。

先輩を「センバ」と呼ぶのが流行ったが三日もたてば初夏、薄曇り

進路希望調査プリント白ければ白いほど嘘っぽくなるの、なぜ?

学校では、後に思い出として取り上げられないが、その時々で誰かの心を動かし、記憶に残るできごとが日々起こっている。

その微細な部分に目を向け、リアリティをもって切り取るのが千葉作品の魅力である。次に挙げる二首のように、固有名詞や場面が読み込まれた歌は特に惹かれる。

文化祭準備で使うマーカーを貸したら「あざっ」と言ったトモロウ

期末テスト記名欄には「友郎」でなく「Onorow」と書く十七歳

字余りや破調であつても、リズムよく軽快に読める一方、「トモロウ」という生徒の十七歳の葛藤がじわりじわりと迫ってくる深みがある。

(早川 晃史)